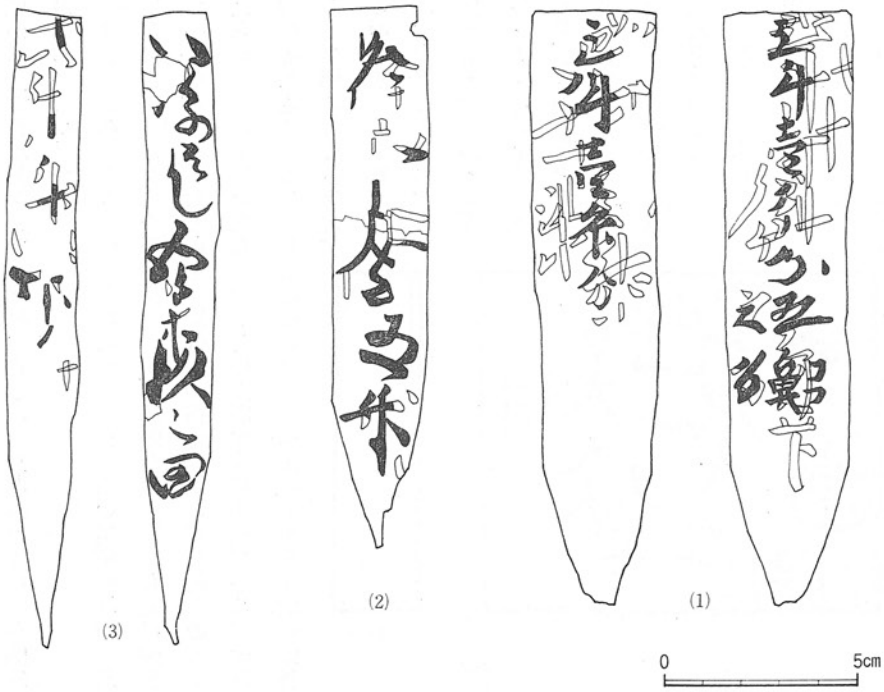


山口・長門国分寺跡

1 所在地　山口県下関市長府宮の内町
2 調査期間　一九八一年（昭56）四月～一一月
3 発掘機関　下関市教育委員会
4 調査担当者　伊東照雄・山内紀嗣・水島稔夫・村田多津江
5 遺跡の種類　寺院跡
6 遺跡の年代　八世紀～一九世紀
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

長門国分寺跡は南西から北東にのびる風化花崗岩起源の砂礫台地の末端部に占地する。遺跡は推定長門国府域の北西隅に接し、また国分寺川を隔てて、西方の淮提峯の東南側山麓地には長門鋳銭所跡が、北方には安養寺遺跡がある。

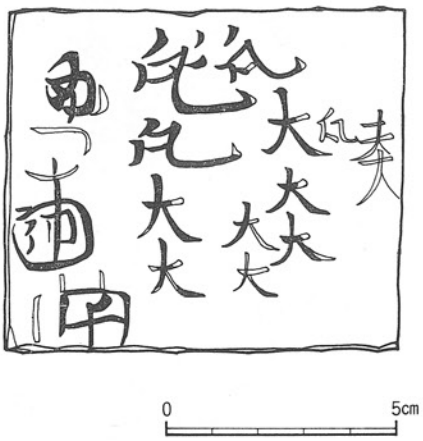
（安岡・小倉）

長門国分寺跡の発掘調査は、長門国府跡周辺の遺跡群の実態解明を目的に計画され、一九七七年・一九七九年・一九八〇年及び一九

八一年と断続的に実施された。この一連の調査によって、八世紀中頃から一九世紀後半まで、七期に画される長門国分寺の時期的変化が明らかとなった。

木簡一点は、LX一〇一と呼ばれる性格不明の遺構の埋積土最上層から出土した。この遺構は、元来は砂礫台地を南から北に開析した小さな谷であったものを、国分寺の占地以前に部分的な改変が加えられて機能していたらしい。その上限年代は不明である。それが国分寺創建にともなう基盤地業に際して周辺の表土や生活廃棄物によって埋めたてられた。

この埋積土最上層からは、木簡とともに、弥生土器・土師器・須恵器・瓦・木製品（建築部材、生活用品）などが出土している。共伴遺物の年代の中心は七世紀後半ないし八世紀前半にあり、八世紀中頃を下限とする。なお一九八〇年出土の木簡二点も同じ遺構からの出土である。



（側面）

8　木簡の釈文・内容

(1)「　大大
　　凡
　　大大大
　凡　大大
凡凡大大
□□□」

75×86×18.5　065

木簡は、スギ板目材の部材を切断して「凡」「大」などを習書したものである。表裏の調整は丁寧ではない。墨痕の遺存は悪いものかなりの字体が風化による盛上りをてがかりに判読した。

なお、木簡釈文の作成及びその内容について、山口大学八木充氏、福岡県立九州歴史資料館倉住靖彦氏から多大の御教示を得た。

9　関係文献

下関市教育委員会『長門国分寺―長門国府周辺遺跡発掘調査報告V―』（一九八二年）
伊東照雄「長門国分寺跡」（『木簡研究』第四号　一九八二年）

（水島稔夫）